



サロンあべの

□ボランティア活動はコミュニケーションが命です

〈サロン・あべの〉1月の出会い

平成18年1月21日(土)〈サロン・あべの〉1月の出会いは、サロンよいとこ、こんなとこー「ボ

ランティア活動はコミュニケーションが命です」をテーマに「阿倍野で生まれ阿倍野で育つて半世紀とちよつと」と言われる生

粋の地元っ子、脇坂博史氏(大阪
市社会福祉協議会 大阪市ボラ
ンティア情報センター)にお話
を伺いました。

・袖ふり合うも多生(他生)の縁

他生の縁というのは、現在の
ことだけを言うのではなく何度
も生まれ変わり、前世の縁を受
け継いだその人が持つ生まれ
たものを言う。本人が自覚しな
い所でもつながりがあると言う。
日本の真裏側は南アメリカのブ
ラジルであるが、自分からまっ
たく知らないブラジルに住んで
いる人に、知り合いをたどって
いくと実に、真ん中6人でたど
りつくというのである。人間の
縁は不思議なもので、初対面の
人でも共通の知り合いを持つこ
とがあり、人のつながりは近く
深いものである。

・サロンとの出会い

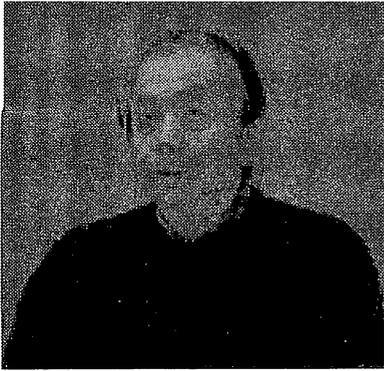
大阪市社会福祉協議会に就職

して、地域福祉活動の推進の仕
事に携わっていた。「地域福祉活
動モデル地区」が大阪市内に概
ね小学校単位に、講座やスクー
ル開催、広報誌の発行などを行
っていた。地域活動のため社協
職員として話しているのは、地
域の役員の方々であった。この
地域活動を推進していく過程で、
高齢者や障害者の方々が存在で
あることに気づき、地域活動に
もつと入っていくべきではと考
えていた。その頃、〈サロン・あ
べの〉が出来ていて、障害者と健
常者がともに活動されているこ
とを知った。

・サロン活動を広げたい

サロン活動のように地域住民
として、健常者も障害者も同じ
視点で、ともに考えることが重
要と確信した。言葉で「共生」を

サロンよいとこ、 こんなとこ



「ボランティア活動はコミュニケーションが命」と脇坂さん

口にするだけではなく、実行することの大切さを感じた。ぜひ、各地に広げたいと思った。(サロン・あべの)の富田さんを訪ね、各区での開催の考えを伝えた。そして、こんな話にのってこれそうな人を探した。核(コア)になりそうな人を淀川で見つけた。その人が「サロン淀川」の窪田さんで、(サロン・あべの)に半年間くらい通ってくれた。その後、窪田さんから「サロンがやっとわかったので、淀川でやります」との連絡が入る。平成6年に「サロン淀川」がスタートする。1カ

月後に、東淀川区の「ウイズ東淀川」も活動を開始した。2年もあれば大阪市内全区にサロンが生まれるかと考えたが、サロン活動を理解しないで始めてはいけない。決してあせってははいかない。サロンの意義を解ってもらいつつ広がって行ってほしいと思った。2年後には、鶴見区に「サロン・つるみ」、住吉区に「サロンのすみよし」が加わった。2年間に2カ所くらいの割合で広がっていった。

・社会参加と元気の素

サロン活動では、多くの方と出会った。社会的障害(社会が障害をつくっている)のある方の社会参加を学ばせてもらった。一人で悩んでいる人が、サロン活動を通じて多くの人と出会い、その娘さんまで参加するようになった。社会参加をして語り、心を開き変化していく。人は人と話し合うことにより肩の重荷をはずし、心を軽くする。サロンを通じて新しい出会いで親友にな

った人々がいた。サロンではそれぞれの個性で背伸びも繕いもなく、ありのままに話せる空間がある。心の差別は実際に話をするこゝでなくなる。人は話をするこゝから生きていることが判る。そのことが判ればその人は元気になっていく。笑い飛ばせる元気が出てくるありがたさがある。また行きたい所に行き、会いたい人に会いに行く幸せ。その日、1日にやることがある。生きることの意味を知ると元気に生活をするようになる。自分の存在をそのまま認められるこゝとが元気の素・・・これこそが真の人權擁護ではないだろうか。

・サロンで学んだこと

サロンは、出入り自由、会費をとらない。機関誌を発行するこゝとで、いつでも参加できるつながりを持っている。毎月の出会い(定例会・定例日)を開催することで、集うことだけでも楽しいし、必ず開催している安心感がある。すべての参加者がすべ

てのボランティア(つていうこともなく)で同じ目線の大切さを実感出来る。「出会い ふれあい 助け合い」の実現は、あたりまえを作っていく。放っておくと弱肉強食になっていく。人が生きていくこと、その存在を尊重する人權を守り、持続することが大切である。

・ボランティアはコミュニケーションが命です

ある老人ホームで、老人に声をかけると「生活に不満はないが、やるこゝとがなくて、1日が長い」と聞いた。お世話することだけでなく、話し相手になる活動が大事と感じた。話し合うこゝとや笑いは、あつてもなくてもよい。が、あつた方が、生活が豊かになる。昔の大阪高等学校(阪南団地に建て替える前)の全寮歌に「君が憂いに我は泣き 我が喜びに君は舞う」という一節がある。この友を想う気持ちにはボランティアに通じるものがあり、人間と人間の関係をもち考えさせられる。Part of Life

にボランティア活動をし、(生活の一部にボランティアをする。)ふくし^{II} さんの ぐらしをしあわせに・・・していく。

休憩の後、参加者に自己紹介や感想を伺いました。

2年前に(サロン・あべの)で

音と香りのコンサートをさせて

いただいた。その後、「サロン北」

○

正しい生活ではなく、楽しい生活が健康に良いことを病気になるって知った。

○

サロン活動は、最初は不安であつたが、スタッフの協力で続けてこられた。

○

健全者も障害者も、お互い知つていること、知らないことを話合いながら相互理解をしてい

サロンを続けている中で、原点に戻つてみんなでコミュニケーションすることが大事であることを再認識した。

——など。サロン活動とは、何かという言い表しにくい。人が生きていく中で、「出会い ふれあい 助け合い」で人とのつながりが広がった(サロン・あべの)1月の出会いでした。

(見出し^{II}中西利香・筆)
(参加者17名 山村貴司)



サロンと私

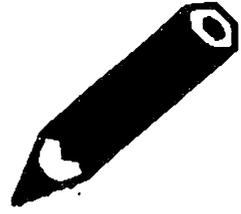
私が(サロン・あべの)に参加させていたようにしたのは、確か2001年頃、「障害者の雇用と就労」についての小論を「サロン・あべの」紙に載せていただいたのがきっかけでした。友人からの紹介で、1年にわ

たつて掲載していただきましたが、担当者である富田慶子さんからの定期的な心温まる自筆のお手紙などでサロンの様子などを知るにつけ、毎月読んでくださる皆さんを想像しながらの執筆は楽しいものだったと記憶しています。その後、何回か月1回の出会いの方にも参加させていただき、サロンの皆さんともお会いする機会を得ることができました。そこに集まられていた方々の性別も年齢も仕事も本当に多様で、サロンが地域福祉の一つの形であることを実感しました。特に印象深かったのは、堺の泉が丘にある国際障害者交流センター、通称「ピックアイ」の見学に皆で

出かけたことです。なかなか一人では見るこ
との出来ない宿泊施設の細かいところ、例えばトイレやお風呂、ベッドの仕組みまで見せていただいたり、また集まられた一人ひとりの視点で注目する箇所が異なったり、サロンならではの見学会だったと思います。その意味では、サロンは日常生活で私たちが属したり、参加したりするどんなグループとも違う何か穏やかな多様性を持った集まりだと感じます。最近なかなか参加できませんが、1カ月に1度の「サロン・あべの」紙が届くのを楽しみにしています。「サロン・あべの」紙は紙面でありながら、あたかも実際にサロンを訪れているような感覚を持てる貴重な存在です。

(茅原聖治)

25



邦子、 ..ん歳の手習い。

映画「わたしの季節」を観て

「第二びわこ学園」の日常生活を描いたドキュメンタリー映画「わたしの季節」を観てきました。滋賀県野洲市にある第二びわこ学園は重度の知的障害および重度の身体的障害が重複している人たちが暮らしている重症心身障害児(者)施設です。医療と教育の機能をもつ児童福祉施設として1966年に開設されました。老朽化にともない、学園が取り壊されて移転することになり、40年間学園で生きてきた入所者の人生を映像に残したいという思いからこの映画は作られました。

映画を撮影した小林茂監督は、彼らは障害のある弱い存在と見られているが、「重くなる障害と闘いつづけ、乗り越えてきた人々なのでした。……彼らに癒され励まされながらの撮影でした」と語り、「大地から芽吹くように人は生まれ、春夏秋冬と季節がめぐるように人は生きてゆく。生きてゆく喜びと、生きてゆく苦しみの間に、それぞれの人生がある」ということが、映画の始まりに浮かんできた言葉であると続けています。それぞれの季節の移り変わる自然の中で、彼らが暮らしている様子が映画の中で淡々と描かれ、映像が美しく流れていくという感じでした。映画は「存在感」と「こころの声」の二つのテーマから作られ、そのテーマは「障害をもつ人々とその家族の姿をかりて、ちりばめられています」と小林監督は語っています。私は映画の中でその家族関係が最も印象深かったです。

「学園開所当時、学校も行けず、友達もいないわが子を思う親たちは、学校と病院を合わせたような施設ができたと聞いて期待と不安の入り交じった気持ちで子どもを預けたのだった(映画パンフレットより)。開所当時

駅までの
いつもの道のまがり角
そよりとポストに近づく一人

俵 万智
(サラダ記念日)

サロンの
一筆箋

一冊一〇〇枚綴り一五〇円

の入園者はほとんどが就学免除の障害者で、わが子に教育を受けさせたいと思う親の心が映画から伝わってくるようでした。

呼吸器が必要な施設入所者の母親は、次のような詩を書いています。「3月24日生後1か月から8年間を過ごした大病院をはなれ、派手な救急車に乗ってやってきました。呼吸ができない大輔はほとんどの時間を白い壁の中でひとりテレビだけを楽しみに過ごしてきました。空が広がって青いこと、風は素肌心地良いこと、木々は季節で彩を変え、そして人はみんなあったかいの……感じてほしい、こびわこ学園にはそれがいっぱい

あるから……」彼女は、毎日施設に来てわが子の介護を手伝っています。そして、病院での生活と違い、多くの人が子どもに声をかけ、話かけてくれるのがうれしいと語っていました。

より自立した暮らしのために、施設を移りたいと考えている電動車イスの男性と、それに戸惑い怒る父親。80歳を越えている父親は、「施設を少しでも良くしたいと思い、長い間役員を続けてきた。……寝ても覚めても子どものことを思い、施設のあるびわ湖の方をながめて暮らしてきた。しかし、息子が行くところとしていいる施設は今より遠い場所であり、今のように会いに行くことはできない」と息子が離れていくことの寂しさを語っていました。

私は、第二びわ湖学園には、20数年前に亡夫が学生の実習見回りに行くのについて行ったことがあります。当時、私はまだ夫の介護経験も短かったので、重度の障害者の方たちを介護されている職員はすごいなと感じたことを思い出しました。また、映画を観て、親子の葛藤や家族の思いは障害に関係なく共通であるような感じがしました。(定藤邦子)

どこの家でもそうかも知れないが、我が家でもいろんな物がどんどん増えていき、どの部屋もいっぱいである。特に自分の部屋は本や原稿やスケッチブック、それに旅行のみやげ品などで足の踏み場もない程だ。

これだけたくさんあってもそんなに大事にしているものや愛着を感じている物もあり見当たらない。ただ私の出版した本を読んでもくれた人の感想文だけは大切にしている。その中で知人のひろし君(4歳)の絵本「たまごがポン！」を読んだ感想文が今でも忘れられない。なぜかと言えば数多くの感想文をもらった人の中でひろし君は最年少なのに文字はきれいに書いてねいに書き、文章もきらりと光っていたからである。ここにひろし君の感想文を記し

ておきたい。

「たまごがポン！」をよみました

ほんのなかの

「シグナル」がよかつたです

こんどは

きょうりゅうの

たまごの

おはなしをかいてく

ださい

ひろし君の感想文

を読んですごうれ

しい反面「恐竜のたまご

の話」を書けとは、大変

な宿題を出されたと頭

を抱えている。でもひ

ろし君と約束したので、いつの日かこのお話を書こうと思っている。このようにひろし君の感想文は私にとって何よりの宝物であり、これからも大切に保存しておきたい。

晴れのち晴れ 89

私の宝物

稲垣 恵雄



□ サンタを信じる (下)

「前号のあらすじ」

保育園に通っている私の長男はサンタクロースの存在を完璧なまでに信じきっているのだが、私自身は、彼と同じ六歳のころには、



もう信じてはいなかった。そんな私が幼稚園を訪問するサンタクロースに園児の代表として質問することになった。ところが「おっちゃん、サンタの服まで着て、なんぼもろたんや？」というのが、私が思いつく唯一の質問であった。(あらすじ、ここまで)

いよいよサンタがやってくる日になったが、私はまだ悩んでいた。「おっちゃん、なんぼもろたんや」と、いきなり聞くのは、いくらなんでもあんまりだ。そんなことを言ったら、雰囲気がち壊しになることは幼い私にも予想ができた。とはいえ、サンタを信じる演技をするのも嫌だった。「そんな子どもじゃないぞ」というプライドがあったのである。

先生にも友達にも相談できず、結局、悩みに悩んだ末、私がとった行動は、その場から逃げることであった。悩んだ内容は大人びたものだったが、とった行動は、まだまだ子どもだったのである。名前を呼ばれたら、さっさ

と逃げ出した。園庭の端まで逃げて、園の周囲に植えられた夾竹桃(きょうちくとう)の木の下にしゃがみこんだ。

百人以上の子どもたちが園庭に並んでサンタを待っていた。そして、いよいよサンタが現われたとき、私は木の陰からこっそりと様子うかがっていた。サンタの顔は小さくてよく見えなかった。私の代理の子が、高い台の上に立ち、マイクを使って何やら質問していた。私がいなくても、とくに混乱もなく進んでいたことには少し不満だったが、ようやく終わったという安心感もあった。

いま振り返ると、私がサンタを信じていなかったのは、近所の子どもたちの影響だと思える。私の育った近隣には多くの子どもたちがいて、年齢にかかわらずいっしょに遊んでいた。小学生のお兄ちゃん、お姉さんもいっしょだった。みんな兄弟がいたから、年上の子の言うことが自然に耳に入ってきていたのだと思う。

それに比べたら、私の長男は保育園と自宅の往復がすべてである。彼がつきあっているのは保育園の子どもたちだけ。近所には子ど

もがいているが、いっしょに仲良く遊ぶという場もないし、子どもの遊びの集団もない。いわば「純粋培養」のような環境のなかで、「サント」なんていうもんか」というような「雑菌」の情報が入る余地がないわけである。

私が子どものころは、オトナが見ていない子どもだけの集団があった。子どもの遊びは年上の子どもが年下の子どもに教えていく。子どももその文化のようなものがあつたと思う。

長男の場合は、そうではない。子どもが子どもに遊びを教えるという機会が、ほとんどないようなのだ。遊びや歌は保育園の先生が教えるものであり、あるいはテレビで知るものである。子ども同士で教えあうのは、それを意図したように流される子ども向けの商品の情報ばかりだという気が

する。

私は高校時代になって地域から離れた学校に通い、自宅と高校の往復だけの日常になつてしまった。ある意味で「純粋培養」の世界に入ってしまったわけだが、そこは大学受験にまつわる偏狭な価値観が支配していて、私は適応できずに苦しんだ。

「サントを信じきっている」というのは「子どもの無垢」の証拠だと喜ぶ人もいるかもしれない。しかし、私は情報の「雑菌」に触れていない危うい状況かもしれないと心配である。なんとか「雑菌」の世界に導いてやるのも、父親の仕事かもしれないと考えている。

(知)

お知らせ

<サロン・あべの>3月の出会い

日時…3月18日(土)午後1時~4時

内容…サロンよいとこ、こんなとこ

<サロン・あべの>20周年記念

久しぶりに「お・か・し」を囲んで

お客さま…本紙エッセイでおなじみの

岡 知史さん

場所…育徳コミュニティセンター2階

研修室(スロープ・車いすトイレ有)

大阪市阿倍野区阪南町5-15-28

TEL. 06-6621-1901

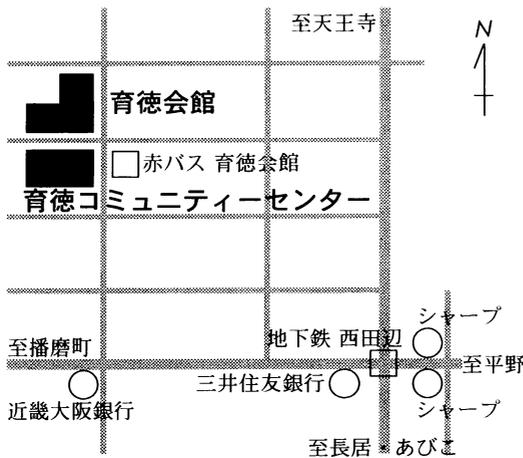
最寄り駅=地下鉄御堂筋線「西田辺」

赤バス「育徳会館」下車すぐ

会費…なし

問い合わせ先…

TEL 06-6691-1028 (冨田慶子)



赤松 昭

「谷間」に

こだわり続けて

21

「若者と家族の会の歩み(その2)」

会設立の反響こそ大きかったものの、設立当初の私たちの活動は大変つましやかなものでした。ヒトモノもそしてお金も、どこからバックアップはありません。T市内の公共施設を借り、毎月1回開く例会が唯一の活動を言えるもので、皆さん現状を変えたいという熱意はあるものの、何をどうしたらいいのか分からない、そうした状態がしばらく続きました。

そんな暗中模索の中でとりあえず何かをしよう、という意気込みで始まったのが、今も

続いている宿泊レクリエーションです。これは関西近郊の宿泊施設に行つて、お風呂に入り、夜には宴会とカラオケ、そして翌日は近場を皆で散策する、という他愛もないものですが、それまで泊まりの外出なんて考えられなかった本人と家族にとつて大きな出来事のようなのです。ある家族は宿泊レクに参加した時の感想をこう語ってくれたことがあります。「今まで病院では医者も看護婦も、あれも出来ない、これも出来ない、将来も回復の見込みがない、などというマイナスの評価ばかりしかしてくれませんでした。しかし、この会の人たちはこの子の出来ることを見つけて、それを評価してくれる。今日ここにきてそれがすごく嬉しかったし、励みになった」。毎月の例会に参加出来ない人も、この時ばかりは何とか都合をつけて遠方からやって来ます。高次脳機能障害のある人から重度の意識障害のある人まで、その年齢や好みも千差万別の中で、会場探しも結構大変です。もちろん、ボランティアで看護師に来てもらつて万一の場合に備えますが、それでも思わぬトラブルに見舞われることもあります。でも、今では欠かせぬ行事として定着しています。

毎月の例会と宿泊レク、とりあえず形になった会の活動でしたが、ある時、外部の方からこんな忠告を受けました。「そんな親睦会みたいなことばかりやっててもダメだよ。もつと社会や行政への働きかけをしないと。運動してこそその障害者団体だろう」。私としては反論したい部分もありましたが、確かに指摘の一部は当たっていましたし、会員の中から同様の声が上がりが始めていました。そこで、とりあえず対外的な活動の第一歩として、現在、筑波大学で看護学の教員をしている紙屋克子さんをお呼びして、講演会を開催することにになりました。看護の世界では知る人ぞ知る、超有名人です。(続く)

ありがとうございます。

カンパ、お菓子・バザー用品の寄贈、また、サロングッズのお買い上げなど、ありがとうございました。

稲垣恵雄、上田敏子、小西京子、西面壮一、玉置明美、中村久子、野村嘉寿子、松村美鈴、松本妙子、山本敏子、吉原和郎、脇坂博史、その他の方々。(敬称略)

美智子のこんな話

岸田美智子

「私は、障害者向けのデリヘル嬢」

最近、新聞の広告欄にこのタイトルの本がしばしば紹介されていて、私も目につき、読んでみようと思っていた1冊でした。たまたまインフルエンザにかかり、外出が禁止されてしまったので、この本を2日間で読みきってしまった。それほど読みやすい本でした。

障害者の性の問題は、まだまだ、やはり遅れていると感じずにはいられない日本の状況ですが、こんな本が出て良かったなとつくづく思いました。

デリヘル嬢であり、作者の大森みゆきさん（仮名）は、勤めた会社が倒産や、規模縮小のために次々とクビになり、おまけに失恋もし

て、うつ病にも追い込まれ、仕方なく風俗の

の想いがあまりにもストレートなのでびつくりしました。

仕事に就こうと決心した時に、たまたまインターネットで障害者専用のデリバリー

仕事に関しては、高額なお金を貰う以上、出来る限りのサービスをしていこうと努力している様子がよく解ります。寝たきりで、言語障害がきつく、意志の疎通が出来ないお客

円〜12000円という文字に興味湧き、やり始めていくストーリーです。

さまとの出会いにおいても、その意思確認の仕方や、サービスを出来るだけ追求しようと、体をアクロバットのように駆使してサービスしてゆきます。

デリヘルというのは、女の子がホテルや、各個人宅へ行き、性的なサービスをするシテムのことです。

本の中に出て来る作者の言葉で、私も共感出来た文章を紹介しておきます。

そして、この会社の趣旨は、「性的欲求は、食欲・睡眠欲と同じように誰にもあることだが、障害者においては、タブー視されている現状がある。それによって、ホームヘルパーなどの現場で、ヘルパーの胸やお尻に触る、抱きつく、性的な話ばかりするというような問題が起こることがある。そういった方達のためにこの団体（店）を作った」ということでした。

「障害者の人たちに、障害がコンプレックスであると思わせない世の中、そういった環境は、どうすれば作れるだろう？ 今、国でやっている福祉事業だけでは、特に恋愛や性の問題というのは、永遠に置き去りにされてしまう気がするの、私だけだろうか」

風俗の仕事そのものについては、賛否両論があり、私も反対の意見でしたが、この作者

皆さんも、ぜひ読んでみて、感想などお聞かせください。

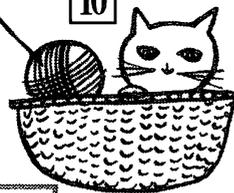
出版：ブックマン社
価格：1300円

ひとつずつ
ひとつだけの世界

——ニット

10

池内沙織




いっしょに「編み物」「織物」を楽しみましょう。

道具は単純、使い方簡単。1本の毛糸(テープ)が編んだり、織ったりすることで、多彩な形になっていくのが——編み物、織物—— 作品のレパートリーが増えるにつれ、どんどん製作意欲も高まります。

なんととっても素材が決め手。オリジナルの糸(テープ)を作りましょう。

■タンスの中に着なくなった懐かしのセーター。ほどいて、ウール洗剤で洗うか、蒸気をかければふっくらした毛糸に復元します。

■セーターをそのまま思いつき乱暴に洗濯機に入れて、縮むだけ縮ませてフェルト状になったものをハサミなどでバイヤスにカットします。

■白のTシャツなどは紅茶ティバッグを入れて煮沸した後乾かし、バイヤスにカットします。

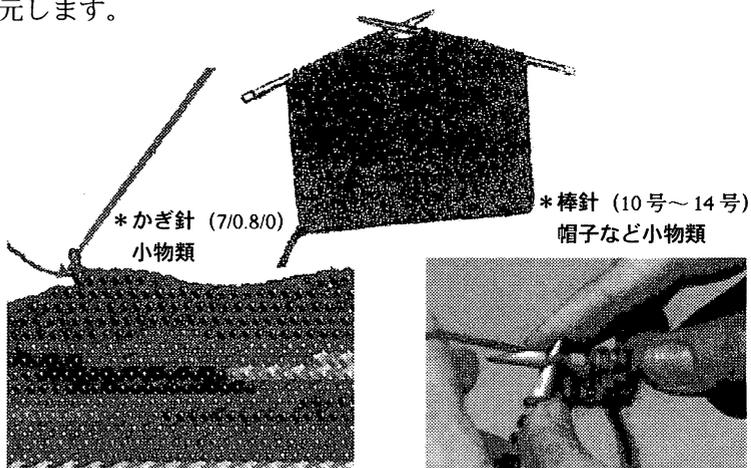
■市販の糸を引き揃えたりしてもいい素材になります。

手始めに、帽子・マフラーなど小物から・・・オンリーワンの作品にチャレンジしましょう。2-3時間で編み上がりします。

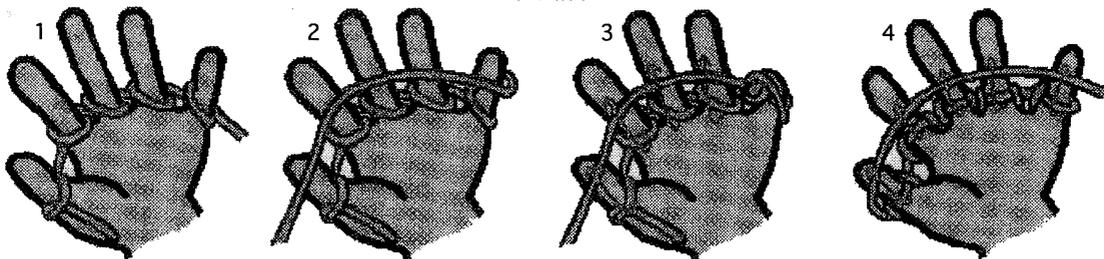
人の心まで温かく癒してくれるニット。

ニューヨークでは「癒し」を求めて、女優やセレブも編み物に夢中とか。アメリカではニットブームに湧いています。カフェで編み物を楽しむのがトレンド。

お茶をいただきながら、おしゃべりしながら、お友達と



*ゆび編み



Yuimari

ゆい・まある (沖縄の方言)
つながり・助け合い・お互いさま

—問い合わせ先：手沙織工房☆池内沙織—
〒567-0048茨木市北春日丘4-9-24井上ビル101
TEL & FAX 072-627-8611 携帯 090-8129-9115
E-mail:tesagurikobo@hcn.zaq.ne.jp



SALOON

読組ニュース

3月はどこのサロンの、どのテーマが
気に入りですか。いい出会いませんか。

■「サロン淀川」3月の出会い

日時：3月19日（日）午後1時30分～4時
内容：いろいろな朗読のかたち、パートⅡ
－ひとつのお話を何人かで読んだり、
みんなで声を合わせて読んでみましょう－
ゲスト：「こもれび」淀川区朗読ボランティア
グループ
会費：なし
場所：淀川区在宅サービスセンター「やすらぎ」
[大阪市淀川区三国本町2-14-3]
問い合わせ先：淀川区社協（ボランティア・ビュー
ロー） ☎ 06-6394-2900
E-mail: sorajii@iris.eonet.ne.jp

■「サロン・にし」3月の出会い

日時：3月11日（土）午後2時～4時
内容：手話を楽しもう！
会費：なし
場所：西区在宅サービスセンター6階
ボランティア・ビューロー室
大阪市西区新町4-5-14（西区役所隣）
地下鉄＝西長堀駅4-A号出口からすぐ
市バス＝地下鉄西長堀駅からすぐ
☎ 06-6539-8075

問い合わせ先：関口 ☎ 090-4281-5641

■「サロン・にしよど」3月の出会い

日時：3月25日（土）午後
内容：未定
参加費：未定
問い合わせ先：中本勝也
☎ 090-9864-9678

■「ウイズ東淀川」3月の出会い

日時：3月12日（日）午後1時30分～4時
内容：ピアカウンセリングってなあに
ゲスト：ピアカウンセリングの講師
会費：なし
場所：東淀川区民会館4階・会議室
問い合わせ先：鈴木昭二
☎・FAX 06-6340-3082

■「サロン北」3月の出会い

日時：3月18日（土）午後2時～3時30分
（開場＝1時30分）
内容：ドイツ生まれのバリアフリー楽器、ヘル
マンハーブミニ演奏会&ティータイム
出演：梶原千里さん（日本ヘルマンハーブ協会
理事長）、ほか
場所：障害者福祉作業所センター「たけのこ」
[大阪市北区本庄東2-6-11 宝来堂
ビル1階、本庄川崎公園北側、緑色のテ
ントのあるビル]
定員：20名程度、お早めにお越しください。
会費：なし
問い合わせ先：サロン北・事務局、担当＝山根
☎ 06-6372-8074
FAX 06-6372-8867

「サロンいたみ」3月はお休みです

サロンの **絵はがき**

5枚1組 180円

汽笛一声・・・

おかしようま
陸蒸気が走り出したのは

ずいぶん昔のこと

黒い煙を出し

白いゆげふいて

汽車は

童謡・唱歌の中に

今も

走り続けています

・ 汽車ポッポ

・ 汽車ぼっぼ

・ かもつれつしや

・ 鉄道唱歌

・ 汽車
出発進行!



え：石田美禰子

寄りみち



1月28日、阿倍野区社会福祉協議会設立55周年記念大会で、<サロン・あべの>が、ボランティアグループとして、表彰を受けました。<サロン・あべの>は、昭和61年3月に「あべのボランティア・ビューロー」に集まった健常者と障害者が語り合う中から生まれた、大阪市内初のサロンです。みなさまに支えられて20年。この節目の年に受賞出来たことは、何よりの20周年記念になりました。本当にうれしいことです。これからももっともっと応援してくださいネ。(石)

<サロン・あべの>VOL.236 発行：平成18(2006)年2月18日 定価¥100
編集人：<サロン・あべの>運営委員会 表題：中西利香・筆 文中イラスト：石田美禰子
事務局：〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 富田慶子方<サロン・あべの>
TEL・FAX 06-6691-1028 郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941
印刷：セルフ社 〒546-0044 東住吉区北田辺町4-23-2 ミスターDビル2F TEL06-6719-8212
ホームページ：http://pweb.sophia.ac.jp/~t-oka/salon/ 「サロン あべの」でも検索できます